

ピョートル・クロボトキン 1842-1921

マックス・ネットラウ¹によるクロボトキン

少年時代と青年時代、教育、シベリアでの士官および探険家としての生活、ペトログラードでの学問と研究の生活、こうした一八四二年（十二月九日）から六十歳の終わりまでの生活のすべては『思い出』²に語られている。彼はごく早くから倦むことを知らぬ勉強家、研究者であり、この抑圧された後進国のロシアに、早くも彼の心を全面的に占め、とらえた対象を見出した。彼は、幾多の形態と無数の色合いのもとにたえず全能の専制主義につきまとい、それと不断に闘い、決して武器を棄てることのなかった反抗の流れを見てとった。彼はいち早く、真の科学を知り、全生涯を捧げてその熱愛者となり、またロシア・シベリアの大きな、豊かな、未来というものに感動させられた。時期も好かった。というのは、彼

は十五歳から二十五歳まで、ニコライ一世死後の自由主義、急進主義の大きな目覚めの目撃者だったからである。彼は、当時のダーウィンその他の同時代人の偉大な著書をおして、自然科学の最盛期に居合せ、またシベリアへの旅は、彼に広大な地平線を開いたのである。

……周知のように彼は、さきに軍人の生活と廷臣の生活を放棄したように、ある時期に科学の生活を放棄し、彼のあらゆる活動のリズムをなす、あの熱烈さをもって民衆の大義に献身することになった。彼はロシアの革命運動に身を投じ、最初から真の革命家たちの小さな集団に加わった。

……一八七二年春スイスに旅行し、チューリッヒでロシアには入り込んでいなかった山のような社会主義文献に熱中した。さきにスイスにいた兄が、ラヴロフ³のとくに実践的にきわめて穏和な意見に従っていた事実やその他同様な関係からして、彼は会ったことのないバクーニ

ンには悪い感情を抱いていた。他方、ヌーシャテルのジャム・ギヨームのもとに着いたとき、ギヨームもすでに彼を警戒していた。そのため、彼は自分がその方に押し寄せられるように感じているアナキストたちと接触をもつにいたらなかった。

彼がギヨームにスイスに留まるべきかどうかをたずねると、ギヨームはロシアに帰るようすすめる。実際彼はロシアに帰り、前にもまして革命の事業に挺身する。彼は、身を犠牲にし、労働者に姿を変えて労働者の秘密集会で演説し、そのため逮捕される。そこで、彼のより内密な活動、組織・通信の仕事、ならびにロシアにおける宣伝をあらゆる形で再組織しようと入念に作りあげた大胆で革命的な計画が露見する。彼は、より急進的な諸サークルが存在するロシア南部に赴き、そこで農村恐怖を提唱しようというもう一つの計画を抱いていた。彼は穏和派が彼の活動を陰険にはばむであろうことに気づいていた。結局、彼は逮捕されたためこの熱狂的な活動から引きはなされた（彼の宣伝にはつねに科学と研究がともなっていたからでもある）。そして国外逃亡後……一八七六年スコットランドに着き、ロンドンに向かった。

しかし、当時何年間も社会主義運動が消えていたロンドンで、彼は何をしようとしたのか？ 短期間のスイス旅行のあと、そこに留まるために再び赴いた。ついに一八七二年の理想を実現し、その他の知的で独立不羈な労働者たちがインターナショナル内部で反権威主義思想を

擁護し弘めるためにあんなにも活動していたスイス・ジュラに住むことにした。いくつもの事件が彼をジャム・ギヨームに近づけた。もともと二人の天性のちがいは、けつして真の親密と友情を生みはしなかった。しかしそのころジャム・ギヨームは、当時アナキストのポール・ブルースのような、より不動ではないにせよ、いっそう活動的な精神の人々に少し身を屈していた。そしてクロボトキンはこのブルースとは容易に理解し合えた。

このインターナショナル員としての活動中、クロボトキンはジュラとスベインのために働き、なおスイスにいるドイツ人労働者のために彼らの最初のアナキズム綱領作成にも時をさいた。同様にポール・ブルースも、ベルンで出版されたドイツ語の最初のアナキズム新聞を編集し執筆（翻訳のため）した。またクロボトキンはギヨーム不在のおりには『ジュラ時報』を編集もし、これに、「事実による宣伝」を称揚（同じ言葉で）したポール・ブルース執筆の論文を掲載した。

たまたまある大会で、彼はベルギーのヴェルヴィエに行くことになったが（一八七七年九月）、訴追をのがれるためパリに赴き、フランス革命の研究をはじめた。彼はスベインのバルセロナおよびマドリッドに旅行し（一八七八年夏、モラゴのテロリスト・グループ（マドリッド）とヴィナスの革命的サンジカリスト・グループとを分裂させていた不和を和らげるのに成功した。実は両派ともアナキストだったのである。

パリは当時アナキストのインターナショナルリストにとって居心地のよい地ではなく、彼は間もなくジュネーヴにひきあげた。

その地で彼の寵児『叛逆者』が生まれたのは、一八七九年初め（二月二十二日）のことであった。……本誌に長編の論文が発表され、これら論文は時事問題を扱っているため、一見個々ばらばらのようであるが、もともとまとめるのにきわめて適しており、無数の小冊子として出版され、翻訳され、ついで『叛逆者の言葉』という一書として出版された。というのは、すべてがあらかじめ定めた計画にしたがって書かれたからである。

なお数年間、クロボトキンの生活には数々の出来事が次々と起こった。カフィエロの書いた一文のためにスイスを追われ、ロンドンで陰うつな一時期を過ごし、その間ロンドンでのインターナショナル大会（一八八一年）に出席した。彼はサヴォアアートのノンで生活することになったが、それは、スイスにはもはや入国することができず、またパリおよびリヨンでアナキストの宣伝が躍進していたため、この宣伝を最も献身的な宣伝家の一人であるこの人物に結びつけようと躍氣となつてフランスからは、いっつもいっそう脅かされていたからである。その一網打尽によつてクロボトキンも捕えられた。彼はリヨンの醜悪な裁判——そこで行なつた彼の起草になるアナキストの宣言はあとで読むことになる——とクレルヴオー監獄で、老ブランキがいたのと同じと思われる監房

を、フランスでの彼の最後の住居にたとえている。というの、数年後、一八八六年初めの大赦によつて釈放されたが、彼はわずかのあいだパリにいたにとどまり、その後、一九一七年春ケレンスキー治下のロシアに帰るまで、三十一年間イギリスに住んだからである。

イギリスでは、ロンドンからかなり遠くはなれたハロ・オン・ザ・ヒルに六年間過ごしたあと、ロンドンに少し近づきはしたが、やはりはなれたケント州ブルムリーに、ついでもっと近いブライトンに住み、骨の折れる、だが平穏な研究と著作の生活を送った。しかし彼のその活動に一連の進路を見出すことができたし、それを調べることは興味がある。

宣伝については、引きつづき『叛逆』誌を出し、これに掲載された一連の教化的論文は『パンの略取』の書名でまとめられた。その『新時代』誌を出した。そして間もなくイギリスで一八八六年十月以降、月刊『フリーダム』誌の刊行をはじめた。

しかし彼の思想を仕上げるため、もう一つの道が提供される。彼は数年来『ニューキヤスル・クロニクル』紙にロシアとその革命、牢獄その他を、『タイムズ』紙に手紙を、『十九世紀』誌に入念な諸論文を執筆していた。そこでこの大雑誌はまたアナキズム思想に関する諸論文をも発表した。かくして「アナキーの科学的基礎」、「将来のアナキー」がその誌上に、一八八七年発表された。ついで一八八八年から一八九〇年にかけてクロボ

トキンは経済問題にとりくみ、『田園・工場・仕事場』をなす諸論文を書いた。その後、自然界におけるアナキー、生存競争の残酷な無秩序ではなく、相互扶助という愛他、連帯的なアナキーを叙述し（一八九〇年から一八九六年および一九一〇年の諸論文）、これから『相互扶助論』が生まれた。彼はこの主題をダーウィニズムとの論争の論文数編（一九一〇、一九一二年）できりをつけ、最後の大問題である倫理学に、一九〇四年から一九〇五年の諸論文でとりかかったが、その続編は、公表されたかどうか、私は知らない。しかし、このきわめて困難な著作が、一七九三年のフランス革命の研究と一九〇五年のロシア革命や、たび重なる病氣、その他幾多の仕事、とりわけ歳とともにつる衰弱からくるあらゆる制約のために中断されたことを私は知っている。

合衆国とカナダへの二回の旅行は、アメリカの雑誌のために書いた『ある革命家の思い出』と講演『ロシア文学・その理想と現実』（一九〇五年）を生んだ。

一九〇五年のロシア革命は、すでに数々のより小部の出版物に要約していたフランス大革命の研究に最終の形を与え、ついに一九〇九年大冊『フランス大革命』として出版された。

歴史および科学に関する研究とマルクス主義との論争は、彼の関心を社会主義の起源やアナキズム思想の歴史に向かわせた。大英百科事典の長い論文および『近代科学とアナキー』は、それを証明している。

無政府主義の理念^{?)}

1 現在の経済的および政治的情勢に関する入念な研究は、われわれに、ヨーロッパは革命に向かって急速に進んでおり、しかもこの革命は一国に限られるものでなく、どこかに勃発すると、一八四八年におけるごとく近隣諸国に拡がり、全ヨーロッパを多かれ少なかれ熱狂させるであろうこと、またそれは、異なる民族においてたどりつたある歴史的段階や地域的条件によってさまざまな性格を帯びながらも、たんに政治的であるのみでなく、なお、とりわけ経済的な革命であるという、一般的な特徴をもつであろうことを確信させた。

2 経済革命は、国民のちがいにより種々の性格をとり、また強度もさまざまに異なることがある。しかし、この性格がどのようなであれ、重要なものは、すべての国の社会主義者が、革命の最中における諸権力の混乱・破壊に乗じ、その全力を尽くして大土地所有、あらゆる種類の労働用具および資本を現在の所有者から無条件に収用し、これらいっさいの資本を耕作者、労働者組織および農業ならびに都市のコミュニンの所有に帰することによ

って、所有制度の変革を大規模に実現することである。

収用の実行は都市および地方の労働者自身によって果たされなければならない。なんらかの政府がそうすることを望むのは、非常な誤りであった。なぜなら、歴史はわれわれに、政府は、革命から生まれたものであっても、すでになしとげられた革命的事実を法的に承認することしかなさなかつたし、なお民衆は、激動の時期に声高く要求した革命的手段から彼らを引き離そうとする政府と、長期にわたって闘わなくてはならなかつたことを教えているからである。しかも、このように重要な手段も、利害関係者自身により、各コミュニティや国土の各地点において自由に実現されない場合には、死んだ文字たるとどまつたのである。

3 社会的資本の収用と共同化は、それが可能となるところではどこでも、またその可能性が見えてくるやいなや、ヨーロッパ全土または大部分が、あるいはあれこれの国が集産主義の思想を受け入れる用意があるかいかは問うことなしに、達成されなくてはならない。集産主義の部分的実現から生ずる不利は、その利点によって大いに相殺されるであろう。しかしかの場所で達成された事実は、それ自体、思想宣伝の最も有力な手段、労働者が集産主義の諸思想を受容する用意があまりなく、収用に訴えることをなお躊躇している土地を動揺させる最も力強い原動力となるであろう。そのうえ、集産主義の

思想を実行するには、それが国民の大多数に承認されるのを待つことが必要かいなかを論ずることは無益であろう。というのは、社会主義空論家たちは、自らが民衆を統制する政府を構成するのでないかぎり、国の大多数の大衆がいぜん動かないときでも、社会主義教育がより進んだ土地で収用が行なわれるのを妨げないだろうからである。

4 ひとたび収用の事実がなしとげられ、資本家の抵抗が打ち砕かれると、ある手探り期間のあと必然的に、最初は限られ、ついで拡大する、生産と交換との新しい形態の組織が生じ、この組織形態は、改良家たちの思考と構想なり、何か法制局の事業なりによってつくりあげられたものにせよ、いかなる理論よりも民衆の渴望と生活および相互関係の要求にはるかに適合するであろう。しかし、今から新しい組織の基礎は、少なくともスイスのフランス語を用いる地方（^{ロマン}地方）では、生産者集団の自由な連合、コミュニティおよび独立したコミュニティ集団の自由な連合にあると予想して誤りでないと思う。

5 革命は、もし直ちに収用を実行するならば、それによって、革命を締め殺そうとする政府を樹立する企図や内部から加えられるかもしれない攻撃に対して、とにもよく抵抗することを可能にする内部的勢力を獲得するであろう。だが、革命が敗北したとき、もしくは収用が

われわれの予想するほど広く行なわれなかったときにも、この基礎の上に開始された民衆の蜂起は、人類に社会革命の到来を早めるという大きな貢献をするであろう。かかる蜂起は、たとえ敗れても、プロレタリアートの運命に（すべての革命のごとく）ある直接の改善をもたらすことによって、万人の利益のために幾人かの人々を収用することを出発点としない。蜂起を、こんごは不可能にするであろう。それゆえ、間近に起こるべき爆発は、必ずや資本主義搾取の停止と、したがってまた経済的および政治的平等、万人のための労働、連帯、自由をもたらすであろう。

6 プロレタリアートが、何世紀にもわたって不斷に闘い、幾多の犠牲者をいけにえにしたあとで待望する権利を持つすべての成果を、革命がもたらすためには、新しい思想の宣伝がたんに大きな知的中心地に限られず、最も孤立した小さな村々にまで浸透し、大衆が社会の根本的再組織に向かって乗り出す前に必然的に彼らの間に現われる無気力に打ち勝ち、さいごに新しい思想が人類の現実的進歩に必要なその後の発展をとげる時間をもつように、革命的な時期が何年もつづくことが必要である。

したがって、当初は革命から生まれながらも、単に新思想が躍動しはじめるというだけで、すでにその本性からして必然的に保守的となるような新しい権力を、顛覆

した権力のかわりにただちに打ち建てようとするところか、すなわち革命の最初の段階を表わしながらも、その後の段階の自由な発展を妨げるのみであり、それを宿命的に不動化し制限するような権力を創り出すところか、いっさいの新しい政府の創出を阻止し、反対に、旧体制を破壊し、同時に社会の新組織を創り出す民衆の力を目覚めさせることこそが、社会主義者の義務である。

7 これが、来たるべき革命と達成しようとする目標についてのわれわれの見解である以上、今日の準備期間中には、収用と集産主義との思想の大々的な宣伝にわれわれのあらゆる努力を集中しなければならないことは明らかである。こうした主義方針をわれわれの頭の片隅にとじこめるかわりに、政治的なもの（これは、革命の経済的性格、すなわち必然的な力を革命に与えることのできる唯一のものを忘れ去り、人々の心にすぐれて政治的な革命の準備をさせようとするであろう）の問題についてだけ民衆に語りかけるために出かけるかわりに、われわれはその反対に、あらゆる状況のなかでつねにこれら主義方針を十分に説明し、その実践の範囲を証示し、その必要性を立証しなければならない。もろもろの政治的・経済的偏見のしみこんだ人々には最初奇妙に思われるにしても、やがて誠実に論ずる人々には異論の余地のない真理、今日の科学がわがものとしている真理、それと公けに闘った人々によってさえいさばば認められてい

る真理となるであろう思想を受けいれるよう、民衆の精神を準備することに、われわれのあらゆる努力を集中しなければならないのである。

政党による一時の、往々にして偽りの成功に眼を奪われることなく、われわれは、この方針のもとに活動し、大衆の間にわれわれの思想を浸透することに努力する。われわれは、それと気づかぬうちにわれわれの思想に有利な輿論への変化をもたらすだろう。また、われわれの目ざす激動期における思想の大々の宣伝に必要な人々を集める。また、収用と集産主義の原理がほとんど広まり、巨万の民衆を鼓吹してこれら原理を実行に移させるのは、平穏な時期には知られない速さで諸思想の普及と変革作用とが起こる時期、まさに激動期においてであることを、われわれは、人間の歴史についての経験によって知っている。

8 革命の時期が何年間か継続することができ、その成果をもたらすためには、来たるべき革命はたんに大都市に限られないことが絶対的に必要である。とりわけ地方に収用のための蜂起が起こらなくてはならない。したがって、沸き立つ時期になって都市から農村にひろがることの可能な革命的躍進を当てることなく、今日からすでに、地方に地盤を準備することが必要である。

一時の方策として、また経験として、ジュラの諸支部は、都市近隣の農村において農村コミューンによる土地

収用の方向を目ざす首尾一貫した宣伝にとりかかる義務を負わなくてはならない。この方向への企てはすでにいくたびかなされたことがあり、それらは始めたさいに予想されたよりも多くの成果をもたらしたことをわれわれは知っている。経験は、何が採るべき最良の途であり、この宣伝を掲げる手段としてどのようなものがありうるかを明らかにするであろう。その第一歩はいかに困難であっても、もはやすぐになされなくてはならない。それに、イタリアにおける農民の蜂起や、今日スペインの農村で行なわれている革命的宣伝についての研究は、いくらか極めても勧めすぎることはないであろう。

9 収用思想のあらゆる形での大々的な宣伝にわれわれの努力を集中することを勧めながらも、われわれはこれによって、周囲で営まれている国の生活のあらゆる問題について煽動する機会を無視してよいというのではない。その反対に、社会主義者は、経済的動揺をひき起こすべきすべての機会を利用しなければならぬと考えている。そしてわれわれは、搾取者に対する被搾取者の闘争の地盤で開始された一つ一つの煽動が、当初はその活動範囲、掲げる目標、提唱する思想がいかに限られたものであっても、野心的陰謀家の掌中に帰することがなければ、社会主義煽動の実り豊かな源泉になることを確信している。

したがって、各支部がその地域のさまざまな問題を、

たんにそれらが社会主義と共通するものをこくわずかし
かもたないという理由で、尊大にも放っておくことのないようにすることが有益であろう。逆にわれわれは、あらゆる問題に関与し、それらの問題が喚起する関心を利用して、より広大な範囲にわたって煽動を拡大するよう働き、問題の実践的基盤にもつきながら、理論的概念を弘めることにつとめ、煽動に関心をいだく人々に独立と叛逆との精神を目覚めさせることができるであろう。こうした関与は、ブルジョア階級がそうしたあらゆる場合に宣伝する誤った見解と闘い、労働者の動揺が野心家たちのひろげる活動のために労働者の利益にまったく反する道に陥るのを防ぐ、ほとんど唯一の手段であるだけに、いっそう必要である。

10 アナキストの努力は、国家をそのあらゆる分野にわたってぐらつかせることを目指すべきであるから、われわれは、自らを政党に結成することが役に立つとは認めない。政党なるものは、現在の政府中心主義の相続者たる役割をいつの日にか果たそうと希望して、政府のやつとこのなかで身動きできなくなるようつとめるものにほかならない。われわれは、政府中心主義のこの機構をぐらつかせる最良の手段は、経済闘争を活潑にすることであると思う。しかしわれわれはまた、政府の行為と手並みにたえず眼を開き、労働する民衆に利害関係のある政治的問題を念入りに研究し、有利なあらゆる機会を利

用して、彼らに現在の政府を構成する階級の無能、偽善、エゴイズム、ならびに統治体制の不正有害な性格をはつきり示すことが有益であると考え。国家とその代表者たちと戦おう。これは、政党がやっているように、彼らの諸協議会に席を占めるためではなく、労働者の渴望に對立するものもろの力を掃り動かし、それらの不可避な崩壊を促進するためである。

11 近い将来に（少なくともフランス語系諸地方で）実現されようとする集団の形態は、国家から独立し、その内部において代議制を廃止し、共同体のための原料、労働用具および資本の収用を実現したコミュニティであろうと確信するわれわれは、集産主義的コミュニティを真剣に研究し、コミュニティと国家との間の政治的および経済的基盤において現に行なわれつつある闘争に、アナキストがいかなる役割を果たしうるかを論議することが必要であると思う。

一八八〇年ジュラ連合大会

翌一八八〇年、スイス・ジュラのショード・フォンにおいて、ジュラ連合大会が開催された。これは一八七二年ハーグでの労働者インターナショナルの分裂以来、ミハイル・バクーニンを継承する「反権威主義的」・絶対自由主義的社会主義の代弁者を自認するものであった。

読者がこれから読むものは次のとおりである。

一 一八八〇年十月十七日の『ル・レヴォルテ』誌に発表の大会議事録の大部の抜萃と、とくにビョートル・クロボトキンの意見。

二 クールトラリ地区労働者連合がこの大会に提出した覚書（もしくは「綱領」）の抜萃。

三 最後は、イタリヤのカルロ・カフイエロが大会に提出した「アナキシーと共産主義」に関する報告。

これらテクストから、ジュラ連合内部の異なる二つの流れを識別することができる。クロボトキン、カフイエロ等の代表する一つは、率直にリベルテールな社会主義であることを言明した。アデマル・ジュヴィッツゲールを代弁者とする、より慎重で望みがそれほど高くない第二のものは、集産主義という言葉を用いることに固執した。

これら二つの傾向の差異は何であったのか？

集産主義は、理論上、生産手段を共有化するにかぎり、労働や能力の生産物の配分様式を決定する自由は労働者組合に任せらるものであり、これは実は果たした提供に依りて労働に報いることに帰着する。これに反してリベルテールの共産主義は、生産手段だけでなく消費物資をも同様に共有化し、それ以来市場に豊富にもたらされる生産物を無料で、各人にその必要に応じて、という方式にしたがって分配しようとする。これはジャム・ギョームが一八七四年以来示唆したものであった（本書二二九—二四〇ページ）。

集産主義を主張する人々の共産主義に対する異議は、とりわけ時宜的な動機に鼓吹されていた。自らアナキスト・コミュニティたることを言明するアデマル・ジュヴィッツゲールが説明しているように、「共産主義観念は、いっさいの自由を排除する体制をつねに信頼する人々の間では、現在まで誤解されてきたのである」。

集産主義という言葉に反対し、リベルテールの共産主義を主張する人々の異議もまた、一八八〇年にこの言葉が、第一インターナショナルにおいて一般に与えられていた意味を奪われたという事実に由来する。改良主義者たちはもはや集産主義によって、労働用具の革命的・全般的共有化ではなく、進化主義的・議会主義的社会主義を考えたのである。

ジュラ連合大会報告 1880

……大会は、一八八〇年十月九、十日、ショード・フォンにおいて開催された。

ジュネーヴ支部の会議に出席した同志クロボトキン
は、会議は綱領が民衆の宣伝に有効に用いられるために
は長文すぎると認めたことを報告する。

ついで綱領の討議に移って彼はこう語る。数年来社会
主義が流行となっており、これが最も期待されないところ
でさえ、こういう声が聞かれる。「われわれはみな社会
主義者だ。」かくして赤色とは紅色、青と緑、白と黒
さえをも含めたあらゆる色合いの社会主義者がいること
になる。資本家と労働者との間の関係を変更する必要を
認める者はすべて、その変更がいかに生ぬるいものであ
っても、社会主義者という言葉で身を飾ることになる。

社会主義の発展を食い止めようという確たる目的をも
って社会主義者と自称する人々にはかかる必要はない。
彼らはさしあたり放っておこう。しかし社会主義の
あらゆる流派、改良主義的、国家主義的、民主主義的等
の流派を研究し、それらをアナキスト的社会主義に比
較するならば、われわれはすぐに、さまざまの流派とわ
れわれとを画然と区別する観念が何かを知ることにな
る。それは、革命が達成すべき事業に対する考え方であ
る。

すべての進化的主義的、社会主義的および若干の革命主
義的社会主義者にさえ、一つの共通した観念が見出され
る。彼らは、間近に迫った大革命を信じないことであ
り、あるいは信じている場合にも、この革命は社会主義

いる人々、それらの人々に支援されたわが敵どもの努力
が、たとえ首尾よくわれわれを打ち負かすことがあるに
しても、少なくとも社会的資本と労働生産物の共有化を
企てたという事実は、それが限られた場所でのことであ
ったにしても、次の革命の決定的勝利を告げる有益な実
例になるだろう。

蜂起がブルジョア階級の権力を破壊するやいなや、民
衆によって実施される収用、生産者の諸集団によるいっ
さいの社会的資本の掌握、これが来たるべき革命のさい
のわれわれの行動方針であろう。とりわけこの点で、わ
れわれは社会主義諸派と異なるのである。彼らは、民衆
をなら信頼せず、ある者は社会主義思想の発展に必要
な自由の確立を口実とし、またある者は小刻みの漸次的
収用の実施、しかも彼らの政府が適当だと判断したとき
にそうするのだということを口実に、結局のところ、来
たるべき革命をたんなる統治形態の変化にとどめようと
している。

もし本連合がジュネーヴ支部の述べる思想を受けいれ
るならば、この要約をしてわが派と進化的主義派との間に
存するこの本質的な差異をいっそう明白にするほうがよ
くはないだろうか？

同志クロボトキンは、さらに、**集産主義**という言葉
を綱領に使うと誤解を招くかもしれない点に気を配ってい
る。

この言葉がインターナショナルで採用されたときに

革命ではないであろうと確信していることである。「来
たるべき運動の日には」と彼らはいう、「民衆はまだ所
有制度に真実の革命をなしとげる用意をしていないだろ
う。それゆえまず最初に、人々の精神に社会革命を準備
させるためのあらゆる便宜を提供するような政治革命を
達成することが問題である。」かくして、彼らのいうと
ころを信ずると、社会革命はわれわれの曾孫が成年に達
したときでないとやって来ないことになる。あらゆる流
派の社会主義者たちの書いたものを研究してみるとよ
い。彼らにおいてはこうした考えが、たとえばどのような
文言でそれを覆っているようにとも、根本において支配して
いることがわかるであろう。

われわれは、臆病な人々が来たるべき革命の射程を制
限しようとするこのような見解に、いくら抗議してもし
たりない。われわれは、収用こそは来たるべき全ヨーロッパ
の闘争の目標であり原動力であることを確信し、こ
の収用が、われわれのだれもが近づきつつあると感じて
いる戦闘で終結したおりに、既成の事実になっているよ
うに、あらゆる努力を傾注しなければならぬ。民衆が
実行し、その喚起する思想の広大な運動があとにつづ
く収用こそは、来たるべき革命に、その前に立ちはだか
る障害に打ち勝つに必要な力を与えることができるであ
ろう。社会発展の新たな時代の出発点として役立つべき
ものこそ、収用である。そして、早々と「君たちはそれ
以上のことはしないだろう！」と民衆にいたげにして

は、人々はこれに今日与えようとしているのとはまったく
別の意味を与えた。インターナショナルは、当時フラ
ンスには共産主義に対して、それに暗に修道院とか兵營
とかにおける閉ざされた僧院の秩序という意味が含まれ
ているというような種々の偏見が存在していたことに注
意して、集産主義という言葉を採用したのである。

そうすることによって、インターナショナルは、社会
的資本の共有化と、各集団が状況に最適と認めた労働生
産物のあれこれの分配方式を、その集団が採用する十分
な自由とを欲するものであることを語ったのである。今
日、人々は集産主義という言葉が別のことを意味するこ
とを理解させようとしている。それは、進化的主義者たち
によると、労働用具の共有化ではなく、生産物の個人的
享受を意味するという。他の人々はさらに進んで、共有
化すべきものを社会的資本、すなわち土地、鉱山、森
林、交通路に限ろうとする。その他の物については、こ
の種の集産主義者は、共同所有たらしめるため、あえて
それらに手をふれる者にたいしては銃を持って護ろうと
するだろう。

いまやこうした誤解を終わらせる時であり、これには
一つの方法しかない。それは、集産主義という言葉は放
棄して率直に共産主義者たることを宣言し、われわれの
無政府共産主義概念と一八四八年の神秘主義的および権
威主義的共産主義者たちが広めた概念との間に存する差
異をきわ立たせることである。われわれはこれによって

われわれの理想をよりよく表明することになり、またわれわれの宣伝は必ずより強められるであらう。それによって共産主義の理念をこそもたらすのであって、インタナショナルは、集産主義の理念によってはけつて与えられないことのない躍進を獲得するであらう。

同志エリゼ・ルクリュは同志クロボトキンの意見を支持する。非共産主義的集産主義者のあらゆる説明にもかかわらず、彼らの社会組織がどのように機能しうるか、彼には理解できないのである。もし、大工場すなわち土地と、そこに存在するすべての第二次的工場が共有化され、労働が万人によって営まれ、生産物の質と量とがまさに努力の結合に負うているとするなら、生産物は、もし労働者の固く結ばれた全体に属するのでないとしたら、正当に誰に帰属すべきであるのか？ 従前の諸世代をふくむ全人類の労働に由来するこの食糧について、いかなる規程が、責任ある分配者を導き、各人に帰属する生産物の分け前を彼らに知らせることができるのか？ 偶然に、または気まぐれになされる分配は、集産主義社会に不和と闘争と死の種を播くという結果しかもたらさないのである。

真実なこと、正しいこと、それは、万人の労働から生みだされた生産物は万人に属していること、各人が、利害にたいする連帯意識と仲間同士の相互的尊重とから生じる規程以外の規程を用いずに、自己の好みに応じて消

費するために、その分け前を自由に取得すること、である。欠乏を懸念することはばかげているだらう。というのは、商業上の現在の浪費や私的専有から生ずる莫大な消耗は、ついになくなるだらうからである。恐ろしいのはつねに、悪しき助言者である。われわれは現にそうなのだから、自分たちを共産主義者というのを恐れまい。民衆の意見はそれなりの論理をもっている。集産主義者たちが何をしようと、いきわたった良識は、土地と工場との専有が必ずや生産物の共有にまでいたることを理解したので。

同志ルクリュはまた、大会が、パリ・コミューンに関するクルトラー覚書のパラグラフについて留保することを望んだ。おそらく場所という条件は、事実上きわめて重要であり、集団の大部分は現在の自治体の境界内に形成されるであらう。しかし革命勢力の集団形成は、あらゆる自治体組織の範囲外に自由に形成されることを見落としてはならない。今までコミューンは小さな国家にほかならなかったし、パリ・コミューンとても、蜂起は下からであったにせよ、統治は上からであり、官吏と職員とのあらゆる階層制を維持した。われわれは国家主義者でないと同じく自治主義者ではない。これを忘れず、今日のわれわれの集会によってその最上の証拠を示すでしょう。われわれは、いかに些細にもせよ、革命の事業に大いに関与することを希望する。トゥーロンから、ジュネーヴから、ローザンヌから、フランスから、ナポリ

からやって来たわれわれは、特定のコミューンにも、いかなる国家にも執着しない。インタナショナルはこうした境界を認めないのだ。

同志シュヴィツゲールは無政府共産主義者であることを言明する。彼が、提出された綱領、すなわち集産主義思想を主とする綱領を認めるのは、人々がこの思想に好意的であるよりもむしろ敵対的であり、率直に共産主義的な綱領を作成するのはこの敵意をつのらせるにすぎないと見るからである。彼は、そこに、慎重に検討することの必要な時宜の問題があることを指摘する。共産主義思想は、いっさいの自由を排除する体制をつねに信頼する人々の中では、これまで誤解されてきた。人々に共産主義を認めさせるには、なすべき多大の準備を要すると彼は思っている。

ジュネーヴ代表の同志ヘルツィヒは、提出された綱領があまりに多くのことをコミューンに帰属せしめ、われわれの反抗する国家の権威をコミューンの権威——それは権威の分散化にはかならないだらう——という新しい形にとりかえようと欲しているように見えることを認めている。来たるべき民衆革命がコミューンにその中心をもち、コミューンの自治を目標とするということが、綱領が述べているように真実であるならば、このことゆえに、われわれはわれわれの方途をこの革命の新概念に

求めたり、もろもろの出来事に打ち勝とうとつとめたりすべきでない。われわれのなすべきことは、いっさいの権威原理にまったく反対する新しい思想を、人々の精神に芽生えさせることである。

綱領は、依然として、政治闘争をコミューンの基礎のうえに進めるべきことを前提している。こうした闘争が国家の顛覆に役立つことが立証されるときでさえ、われわれはこの意見に反対しなければならぬ。というのは、そうした闘争を企てるには、必然的に合法的な方途につくことが必要になり、このことはわれわれの原理に反し、その放棄を前提するだらうからである。

同志カフィエロは、革命的綱領について語り、共産主義についても述べた。

同志バンディは、ただ単に共産主義の思想がフランスの労働者に受け入れられるというだけではなく、彼らにあっては共産主義の心情がもとと具わっているという事情を指摘している。彼がこの時期に集産主義者を自称するのは、一八四八年以来、当時の共産主義について語られた滑稽な作り話のためである。彼が共産主義という言葉を嫌うとしても、あらゆる場合に事を行なう用意のあることには変わりない。バンディ自身それを本能的に実行したが、しかしそれにもかかわらず、今日なお彼は、この言葉が、この言葉のみがフランスの革命的労働

者に反感を起こさせていると思つてゐる。

他方、彼は、現在の偽りの進歩主義的社會主義者たちの仮面をはぐため、こうした言葉の眞の意味を明らかにし、物ごとに適切な言葉をつける必要があることを言明している。

彼はわれわれの綱領がこの目的を達するであろうと考へてゐる。

大会は綱領と結びついた次の決議を行なうものとする。

「大会は、クルトラリ地区労働者連合公表の覚書の朗読を聞いたのち、すべての社會主義者および社會問題に関心を抱くすべての人々が、この出版物に注意を払われることを勧告する。

しかし大会は、綱領の二点については、より明瞭に決定できると言明する。

コミュニンに關して述べた思想は、問題が現在の國家という形態をコミュニンというより制限された形態にかゝることにあると、思ひかねない。われわれは、全般的にせよ制限的にせよ、いさゝかの國家的形態の消滅を欲するものであり、われわれにとつてコミュニンとは、自由な人間の諸集團の有機的な形態の集合的表現にほかならないのである。

集産主義の觀念は、数々のあいまいな解釈をひき起こしたが、これを一掃することが重要である。われわれは、生産手段の共有という見地のみでなく、さらに生産

物の共同の享受・消費という見地から、その論理的帰結のすべてをとらせた集産主義を望むものである。したがって、無政府共產主義は、社會革命の必然的・不可避的な帰結であり、この革命が開始する新文明の表現であるだろう。

われわれは、この重要な問題の研究が、論証の基礎として、ある一定のコミュニンにこれらの理論を適用し、適用上の難易にかかわりなく、このコミュニンを構成するすべての要素を考慮しながら、ひきつづきなされる旨の希望を表明する。

大会は、クルトラリ地区社會主義労働者連合提出の覚書を要約した小冊子が、労働者への宣伝のために出版されることを望むものである」

クルトラリ労働者連合の、一八八〇年 ジュラ大会提出の覚書

まったく注目すべき文書である本綱領は、短い紹介を必要とするが、それには注意に値する若干の点を強調することが適當である。

まず最初に、覚書は労働者たちによつて作成されたものであり、「われわれ筋肉労働者にとつては……」という言葉ではじまっている。同志たちにかつてこれを書いたのは、彫版師・細工師のアデマル・シュヴィツゲルである。これら労働者は自らの欲するものが何であるかをよく知つてゐる。彼らは、

「現在の國家を共產主義國家に改造するため」権力を掌握しようと思ひこんでゐる權威主義的社會主義者たちに、彼らの眞實を率直に語りかける。彼らはこうした社會主義者を論駁するために遠慮なく、「われわれはこのような見方をともにすることはできない」と。そして彼らは、彼らの眼には國家として映る進歩への障害を、彼らが生活し労働する田舎で描かれ鼓吹された次の文句ではつきり非難する。「人間社會は前進する。國家はつねにサボ（木靴、歯留）だ」

しかし、大衆の自發性の支持者であるリベルテールたちは、社會革命を導くために、彼らの見地からは不可欠な、行動的少數派を軽蔑はしない。「この革命について理論的構想を抱いてゐる党派の……介入は、いぜんとして重要な要因である」

しかし、これと同時に、勝利を収めた革命が、その中から出現した指導者たちによつて妥協せしめられるという危険も見落としてはしない。そこで彼らは、革命が「再び統治者階級を利用する方向に転じない」ようにする必要があることを力説する。

彼らは、バクニンおよびジャム・ギョームの忠実な弟子ではあつたが、時代に先んじてゐた。というのは一八八〇年のアナキストはまだサンジカリストではなかつたのに（Ⅱ巻六〇ページ以下）、彼らは、職業団体の連合を称讃し、コミュニンと労働組合との綜合を探索してゐるからである。彼らはこう自問する。革命後のコミュニンは住民全体の一般集會によつて指導され管理されるのか、それとも諸職業団体の地域代表によつてか？ しかし、労働者である彼らは第二の解決を選ぶ。すなわち、將來のコミュニンを構成するのは、職業団体の地方的連合であらうというのである。

かくして、一九三六年の革命のさなかにスペインのリベルテ

ール（絶対自由主義的）共產主義者たちに具体的に提起された諸問題が（Ⅱ巻八五ページ以下）、一八八〇年すでにクルトラリ地区の筋肉労働者たちによつて着手されてゐたのである。労働者自主管理の基本原則の一つもまた、彼らに予見されてゐた。「中央集權的・官僚制的管理の過誤に再び陥らないためには、コミュニンは、國民的かつ國際的段階での大規模な公益事業と同じく、地域計画においても、唯一かつ単一の行政官庁によつて管理されるべきではなく、各活動分野に応じた様々な専門委員會によつて営まれなくてはならない、と彼らには考へられてゐる。これこそ、現代に於て、数ある自主管理的な共同体のなかで優勢となつた構造なのである。

綱領（抜萃）

……筋肉労働者たるわれわれのなすべき仕事は、労働者人口が増加してゆく状況によつてさし示されてゐる。われわれの労働は完成作業であるよりも表示的な作業であるだろう。われわれは、知つてゐることを表明し、われわれの渴望を語り、われわれの要求を決定し、民衆の良識の論理をもつて結論を下すであらう。

……ブルジョア社會の基礎そのものを攻撃する社會革命は、新しい基礎の勝利をもたらすことによつて人間社會の發展に貢献するであらう。平和的進歩、細部にわたる継続的改革の事業は、人間社會の存立条件を變革したあらゆる大革命後にはそうであつたように、社會革命後もひきつづき行なわれるであらう。

この革命はたんに理論的な一概念ではない。それは事

物の本性のうちにあり、そこに導くものこそ現実の状況の発展である。しかし、状況が革命の樞として主要な要素であるとすれば、この革命に関する理論的構想をもつ党派の多かれ少なかれ知的かつ適切な関与は、やはり重要な要因である。このことから、革命が天から落ちてくるを待つのではなく、可能なかぎり革命を準備すること、とりわけそれが再び統治者階級を利用する方向に向かないようにすることが必要になる。

……われわれは、大いに強調された二つの一般的な傾向をまのあたりにしている。そのうちの一つは、労働者階級の現行政治への参加および彼らによる国家の政治権力の獲得を吹聴している。もう一つは、それと反対に国家の政治行動からの実質的回避を称讃している。

権威主義的社会主義と無政府主義的社会主義とをそれぞれの代表とする二つの流派を構成したのは、新しい社会の政治形態についての異なる理論的構想であったのである。

権威主義的社会主義は、全能の中央集権的な、選挙にもとづく権力に支配される国家以外の政治形態を考へることができないため、現存国家を共産主義国家に転換するために、国家権力を奪取して所有制度における革命を達成することを望んでいる。

われわれはこの見方をとめることはできない。社会主義者の欲する経済革命は、その力と革命的躍動がどのようなものであるにせよ、中央権力の命令によって行

なわれうるにはあまりにも深遠な革命である。指令された革命は、それが民衆自身により、国土のあらゆる地点において遂行されるのでなかったら、死んだ文字たるとどまるであろう。そして、たとえ共産主義国家が一時的に存在しうるとしても、それは必然的に崩壊の芽を内蔵することになるであらう。なぜなら、それは社会問題の一部、経済的改革しか解決しないからである。

人間の自由——より広義の概念における——の実現という問題のすべてはいぜん存在する。国家はその構成と発現の本性そのものからして、人間を解放せず、むしろ吸収するからである。共産主義国家は、ブルジョア国家にもまして個人を破棄し、力によって支配するであらう。われわれにとって、社会問題の解決とは、大衆のための物質的福祉の可能性も最も十分な実現のみでなく、なお、万人および各人にとっての自由の最も広範な獲得をもふくむのである。これこそ、われわれが共産主義国家のいかなる支持者でもなく、したがって、論理的にかかると国家に導く政治の敵たる理由である。

……人間社会は前進する。国家はつねにサボである。現代の事態を検討すれば、われわれが提出する事柄について紛れもない証左が提供される。

国家社会主義政党は、合法的基盤において政治的に活動するためには、不幸にしてただ一つのこと、すなわち共産主義綱領をポケットにしまいこみ、それで大衆を糾合することが期待されるような身近な実践的綱領を当ては、しばしば瑣末でさえある、この実際的な結びつきによってである。

国家は税金を徴収し、各人はより少なく納めようとす。国家は権限に専心し、人々はすべて廉く公正な裁判を欲している。国家は学校のことにかかわり、両親は子供たちに無償のよい教育を望んでいる。国家は教会のことを気にし、ある者は自由派教会を、他の者は正統派もしくは教王至上権主義の教会を、また別の人々はいかなる教会にも属さないよう国家が放っておくことを欲している。国家は警察の事にたずさわり、各人は身の安全が国家によって守られることを望んでいる。国家は軍事組織を備え、多くの者は、あるいは常備兵あるいは義勇兵として兵士たる義務を負っている。国家は道路、森林、河川のことにたずさわら、これらすべての事業が公衆の利益を満たしているにちがいない。国家は統治者、行政者、立法者を選出し、制度と法律を票決する権利を認め、すべての人々が市民・選挙人たるよう信頼されている。

この実生活上の瑣末事という問題の一つまたはもっと多くとかかわりあいになっている諸個人たる諸君のかたわれらには、体制にがんじがらめにされた大衆がいる。全国

がうしかなかった。人々は、ブルジョア民主主義の進歩的綱領のなからいくつかの目立った点を取りだし、それに社会主義の色合いを加味してみるとよい。そうすれば、合法的社会主義政党の即時的実現という綱領が、いろいろと生み出されることになる。

ブルジョア国家はこの平和的基盤での闘争さえ認めなかったし、ヨーロッパにおいてこの合法的社会主義が一つの勢力をなした唯一の国であるドイツは、徹底的な反動の光景を呈している。社会主義政党の後退とその壊滅は、長期にわたる勢力をほこった運動全体の帰結なのである。

国家主義的政策というこの戦術は、したがってわれわれには真実のものとは思われない。棄権の戦術を検討するとしよう。アナキストは、社会問題を拡大し、そこに所有の変革と並んで国家の破壊を導くことにより、論理的にこう推論する。われわれは、国家を掌握して変更し改造することにとめどどこか、その反対に国家を孤立させ、国家に協力しているいっさいの精神のおよび物質的な力を弱めなければならぬ。これが現今の棄権論的思潮の起りである。不幸にして、良識、理論的論理は、行為の現実とまれにしか合致しない。一般民衆が国家の立法者、統治者、管理者を選出することを拒否し、憲法、法律を否認し、納税、兵役を拒否することが理論的にはまったく真実であるにしても、国家は歴史の中に生きてきたし、他方実際には、大部分の人々が現実の社

よって、直接に、申し分なく行なわれるであろうと、あえて考え口にする者は、ほとんどいないのである。

……われわれが、コミュニティにこそ社会革命の焦点が存するであろうと語るのを正当づける三つの要素がある。古いジャコバン革命の伝統はもうすたれ、パリ・コミュニティ以来、コミュニティの自治と連合との理念をめぐって新しい革命的伝統が成立している。精神の状態はこの新しい政治形態の方向にますます傾きつつあり、過度の中央集権制はいたるところで住民に重苦しく感じられている。物質的狀態の発展ならびに新しい輿論の流れは、自主的コミュニティとコミュニティ連合を生みだしつつある。こうした一般考察をわが党派の予備的戦術の必然的結論につけ加えるとき、われわれは、民衆蜂起の叫びがあるのはコミュニティにおいてであると、確信することができる。

そこでわれわれは、コミュニティにおいてただちにとられるべき革命方策を取りあげなくてはならない。

大衆に対するブルジョア階級の勢力は、経済的諸特権、政治的支配およびこれら特権についての法制的措置にその根源をもっている。したがって、ブルジョア勢力のさまざまな発現と同じく、これら根源に攻撃を加えないてはならない。

以下の諸方策は、敵に対する武力闘争と同程度に、革命を救うために不可欠であると思われる。

社会的資本、地主所有地、鉱山、住居、宗教上および

公共の建物、労働用具、原料、貴金屬、宝石や高価な石、製造物の蜂起者による没収。

政治、行政および司法にわたる当局者すべての解任。団体的または私的負債の返済および遺産の譲渡に対するいっさいの法的干渉の廃止。

すべての租税の廃止。

軍隊および警察の解体。

地代・所有権・抵当権の証券、有価証券、譲渡証券の焼却。

これらが、破壊の方策であると思われる。——では何が革命の有機的方策であるべきなのか？

職業組合の即時的・自発的形成、特殊的生産の遂行に適合する社会的資本の分け前の当該団体による一時的占有、職業組合の地域的連合と労働の組織化。

生活資料の当面の供給を確保する地区集団とこれら集団の連合体の建設。

蜂起諸勢力の組織化。

地区集団代表によって構成され、革命的コミュニティの諸事業の運営上、それぞれが一個の専門性を有する諸委員会、すなわち、革命の敵に対する警備委員会、革命軍事委員会、社会資本統制委員会、労働委員会、生活資料委員会、流通業務委員会、保健委員会、教育委員会の設立。

蜂起した諸コミュニティの全革命勢力の連合化に努力し、革命的宣伝によってすべてのコミュニティと地方に蜂

起を誘発し、現存秩序の破壊と革命救済に適する方策を可能なき限り最大限にわたって適用することを任務とする、対外行動委員会の設立。

いっさいの反動勢力を全滅させるまで、革命永続化を目的とするコミュニティ連合および大衆の組織化。

集産主義は……、われわれには新しい社会の一般的形態であるように思われる。しかしわれわれは、その組織と機能とを自由なものたらしめることに全力を尽くすであらう。

……職業組合が建設されたなら、問題は地域生活を組織化することである。この地域生活の機関をなすものが職業団体の連合であり、この地域的連合が将来のコミュニティを構成するであらう。コミュニティの契約を作成するのは、住民の一般集会なのか、それとも職業組合の代表であって、あとでそれらの個々の集会に付議するのか？ このいずれの方式を選択するかに立ち止まるのは、子供っぽいことのように思われる。二つの方式はともにおそらく伝統とコミュニティの特定の重要性に応じた機能を果たすであらう。ここでは、一般に普通選挙という多少とも民主的なやり方は、科学的に組織された社会、すなわち、もはやむだな人為の公式ではなく、現実の事実が社会生活全体の基礎をなすであらう社会においては、ますますその重要性を失うことを述べておくのは有益と思う。

コミュニティの権限はどのようなものであらうか？ あ

らゆる社会的富の保全、心土(表土の下)・土地・建物・機械器具・原料等さまざまな資本の利用に関する職業団体の管理、一般利害に関する事柄については労働組織に対する統制、生産物の交換と場合によっては分配および消費の組織、道路・建設物・散歩路・公園の保全、いっさいの災害に対する保障、保健衛生、安全、地域統計、子供の養育・知育・教育の組織、芸術・科学・発見・応用の奨励。

われわれは、これら種々の活動部門にわたる地域の生活も、職業組織と等しく自由であることを欲する。いま列挙した種々の事業を果たすための、個人なり集団なり地区なりの自由な組織のことである。

中央集権的・官僚制的管理の過誤に再び陥らないためには、コミュニティの一般利害は、ただ一つの管理機関によって管理されるべきではなく、地域のこれこれの事業の組織者・当事者をもって直接構成された、各活動部門のための種々の専門委員会によって管理されなければならないと考える。こうした方式は、地域の管理運営から統治的性格を取り去り、その全体として、地域の利益をよりよく組織しつつ、自治の原理を保持するであらう。

……種々の一般「公益」事業「の」管理に当たっても、人々は、コミュニティの管理におけると同じく、専門化の原理を適用し、かくしてわれわれは、一般的利益を組織化することによって新しい形態の国家に再び陥るといふ、無政府主義的社会主義に対して加えられた非難に

根拠を与えるのを避けることになる。

アナキーと共産主義

ジュラ大会におけるカルロ・カフィエロの報告

パリで開催の中部地区大会において、アナキストに対する激しい攻撃で著名なある演説者はこう語った。「共産主義とアナキーとがいっしょになろうとわめいてゐる」

もう一人の、やはりアナキストに反対ではあるが、これほど荒々しくはない演説者は、経済的平等について語りながら、こう述べた。「平等が存在するとき、どうして自由が侵害されうるか？」

ところが、私は二人の演説者は間違っていると考える。

人々は、最小限の自由ももつことなしに、経済的平等を全的に有することができる。いくつかの宗教的共同体はその生きた証拠である。そこでは最も十全な平等が専制と同時に存在するからである。十全な平等というものは、長たの者も他の人々と同じラシャを身にまとい、同じテーブルで食事し、ただ指図する権利をもつことによつて他と異なるのみだからである。では「人民国家」の賛成者たちはどうか？ もしもあらゆる種類の障害に会わないとしたら、彼らは必ずやいいにはまったくの平等

を実現するであろうが、しかし同時にまた、まったくの専制を実現するであろう。というのは、忘れてはならないことだが、国家の手に移るすべての資本の経済的専制から現存国家の専制が昂進し、この新しい国家に必然的なあらゆる中央集権化によつて、専制全体が増進せしめられるだろうからである。そしてこれゆえにこそ、自由の友であるわれわれアナキストは、彼らと飽くまで戦おうとするのである。

かくして、上述されたこととは反対に、平等が存在するときでさえ、自由のことを懸念するのはまったく正当である。しかるに、真の自由すなわちアナキーが存在するところでは、平等に対するいかなる懸念もありえないのである。

要するに、アナキーと共産主義とは、いっしょになろうとわめくどころか、いっしょになるまいとわめいてゐるのだ。なぜなら、自由および平等と同義であるこれら二つの言葉は、革命の必要不可欠な二つの用語だからである。

われわれの革命の理想は、人の知るように、きわめて単純である。それは、すべての先駆者におけると同じく、二つの言葉、自由と平等とである。そこにはたんに、わずかの差異があるにすぎない。

あらゆる種類の、またあらゆる時代の反動家たちが自由と平等についてなしてきたごまかしに教えられたわれわれは、これら二つの言葉のそばに正確な価値の表現を

おくことを思いついた。これら二つの貴重な貨幣はあまりにもしばしば偽造されたため、われわれはついに、ぜひともその正確な価値を知り、それを測定しようとするのである。

それゆえわれわれは、自由と平等という二つの用語のかたわらに、その明瞭な意味が誤解されるおそれのありやうのない二つの同意語をおき、こう語る。「われわれは自由すなわちアナキーを欲し、平等すなわち共産主義を欲する」と。

アナキー、今日それは、攻撃であり、いっさいの権威、いっさいの権力、いっさいの国家に対する戦いである。将来の社会においては、アナキーは、防御であり、いっさいの権威、いっさいの権力、いっさいの国家の再建に対する妨害である。すなわちそれは、自由、ただ己れの欲求・趣味・共感に促されて他の諸個人と結合して集団または結社をなす、個人のまったく自由であり、コミュニケーションまたは地区内の他の結社と連合する結社の自由な発展であり、諸コミュニケーションが地方的に、地方が全国的に、国が人類的に連合を形成する自由な発展である。

われわれが今日とくに関心を抱く問題である共産主義は、われわれの革命理想の第二の点である。

共産主義も現実にはやはり攻撃である。といっても、権威の破壊ではなく、地球上に存在するすべての富を全人類の名において占有することである。将来社会では共

産主義は、現存するあらゆる富をすべての人々が次の原則に従つて享受することであろう。各人からはその能力に依りて、各人にはその必要に依りて、すなわち、各人にまた各人からその意志に従つて、という原則である。だが、現存するすべての富の占有および享受が、われわれにあっては、民衆自身の行為でなくてはならないこと、このことは注意しておく必要があり、とりわけわれわれの反対者である権威主義的もしくは国家主義的な共産主義者に応えるものである。

民衆、人類とは富を占有し、その両手に保持する能力のある個人にほかならないがゆえに、なるほど、共同の富の管理者、代表者、処理者の全階級を指定することが必要かもしれない。しかしわれわれはこの意見には与しない。結局はいつも彼ら自身だけを代表することになる仲介者、代表者は必要でない。平等の調節者、まして自由の調節者は必要ではなく、それが、いかに人民的あるいは民主的、革命的あるいは一時的と称されようと、新しい政府、新しい国家であるかぎり、必要ではない。

共同の富は全世界に散在し、法的には全人類のものであるから、それを手にしうるところにあり、またそれを利用しうる人々は、それを共同で利用するであろう。これこれの国の人々は、その国の土地、機械、工場、家屋等々を利用するであろう。人類の一部である彼らは、この場合、人類の富の一部に対する彼らの権利を実際にま

た直接に行使するであろう。だが、もし北京の一住民がこの国にやってくる場合には、彼も他の人々と同等の権利を有し、この国のすべての富を他の人々と共同で、彼が北京でなしたと同じように、享受するであろう。

したがって、アナキストを、同業組合所有を打ち建てたものとして非難した演説者はきわめて間違っている。

国家を破壊して多数の小国家にとりかえ、一つ頭の怪物を殺して千の頭をもつ怪物を養うのだとしたら、さぞみことなことがあるう！

いな、われわれはいったし、またくりかえしいうことを止めまい、結局はいつも紛れもない主人になる仲介者、ブローカー、世話好きな奉仕者はまったく無用だ、と。われわれが欲するのは、現存するすべての富が民衆自身によって直接掌握され、彼らの力強い手で保存され、それを生産なり消費なりに最も良く利用する方法を決定することである。

いかにも、共産主義は適用可能である。各人に必要なものは万人にとって十分なほどあるだろうから、それを各人の欲するままに取得させておくことができるであろう。翌日のために十分な生産物はいつもあるだろうから、各人が提供しようとするより多くの労働を要求することはもはやないであろう。

そしてこの豊かさのおかげで、労働は屈従という恥ずべき性質をなくし、研究し自然とともに生きる魅力と同じような、精神のおよび肉体的欲求を満たす魅力だけがある。

打ち建ててである。われわれはたちまちにして「清潔な」労働と「不潔な」労働、「高尚な」労働と「卑しい」労働が、再び現われるのを見るだろう。前者は富裕な人々によってなされ、後者は貧しい人々に割り当てられるだろう。そうなったとき、人がほかよりもこれこれの活動部門に就くのを決定するのは、もはや天性や個人的な好みではなく、利益であり、これこれの職業においてより多く利得がえられるという望みであろう。このようにして、怠惰と勤勉、善と悪、悪徳と美德が再び生まれ、その結果一方では「報償」、他方では刑罰、法律、裁判官、警官、監獄を生むことになる。

正義の感情を引き合いにして、生産物を個人に割りふるという考えをあくまで主張する社会主義者たちも存在する。

奇妙な幻想だ！ 大量に生産し、機械を大規模に使用する必要性がわれわれに課する集団的労働をもつてして、先立つ諸世代の労働を利用する近代的労働の、つねに増大していくこの傾向をもつてして、どうして、ある労働の生産物の取り分と他の労働の生産物の取り分とを決定することができようか？ これはまったく不可能であり、わが反対者たちもこれをよく知り、しまいにはこういうのだ——「ええ、そうですよ、私たちは労働時間の配分を基にするんです」と。しかし彼らは同時に、これが正しくないことを認めている。ピエールの三時間の労働が、しばしばボールの五時間の労働に相当すること

残るであろう。

これはなにも共産主義が可能なことだと確言するのではない。われわれが確言できるのは、それが必要だということである。人々は、共産主義者でありうるだけでなく、共産主義者でなくてはならないし、さもないと革命の目標を欠くことになるであろう。

実際、労働用具と原料を共有化したあと、いぜん労働生産物の個人的専有を保持するならば、われわれは貨幣を、したがって個々人の功績、あるいはむしろその多少に依じての、多少なり多くの富の蓄積を保有せざるをえなくなるであろう。かくして平等は消滅する。より多くの富を占有した者は、そのこと自体によってすでに他の者の上位にのぼることになるだろうからである。そのあと、反革命家たちが相続権を確立するまでにはほんの一步でしかない。また実際にも私は、生産物を個人に割りふることを支持していた、著名な、革命的と自称するある社会主義者が、ついには、社会がこれら生産物が相続財産として譲渡されるのを認めることに不都合はないと明言するのを聞いたことがある。こうしたことは、彼によると結果に影響しないという。だが、このような富の蓄積と相続による譲渡によって社会が陥る結果を仔細に知るわれわれとしては、この問題に疑問はありえないのである。

しかし、生産物を個人に割りふることは、人々の間だけでなく、なお労働の異なる部門の間にも不平等を再び

がありうるからである。

かつてわれわれは、自らを「集産主義者」と称した。これがわれわれを個人主義者および権威主義的共産主義者から区別する言葉だったからである。しかしわれわれは、実際、たんに反権威主義的共産主義者であり、「集産主義者」を称することによって、労働の用具・資材と集団的労働生産物の間に区別を設けることなく、すべてを共有化すべきであるというわれわれの考えを表明しようと考えたのである。

ところが、ある日われわれは、過去の過誤をむし返し、この問題について哲学的に論議し、識別し、区別することに得意になって新しい色合いの社会主義者が現われてきたのを見た。彼らはとうとう次の主張の使徒となつていたのである。

彼らのいうところによると、「使用価値と生産価値とが存在する。使用価値とは、われわれが個人的欲求を満たすために用いる価値である。われわれが住む家屋、消費する食料品、衣服、書籍等々がこれである。他方、生産価値とは、われわれが生産するために役立てる価値である。工場、納屋、家畜小屋、倉庫、あらゆる種類の機械器具、土地、労働資材等々がこれである。個人の欲求充足に役立つ前者の価値は——と彼らはいう——個人に帰せられるものとされなければならない。しかるに生産するために万人に役立つ後者は、集団に帰せられるべきである」

これが、好都合とわかった、むしろ再びもたされた新しい経済理論であった。

だが私は諸君に、機械を動かすのに使用する石炭、機械に差す油、機械の運転を活潑にする油に、生産価値という好ましい名称を与える諸君に聞きたい。なぜ諸君は、私が身を養うパンや肉、私の食べるサラダに風味をそえる油、私の研究のさいの明かりとなるガス、あらゆる機械のうちに最も完全な機械、あらゆる機械の創始者たる人間を生かし、進歩させるのに役立ついっさいのものに対して、この名称を用いることを拒むのか？と。

諸君は生産価値のうちに牛や馬を保護するのに用いる牧場や家畜小屋を分類しながら、すべての動物のうち最も高貴な動物である人間に用いられる家屋や庭をそれから除外しようとする。

諸君の論理はどこにあるのか？

それに、このような理論の使徒である諸君自身、こうした区別が現実には存在しないこと、今日すでにかかる区別を指定することが困難であるならば、すべての者が消費者であると同時に生産者である日には、それはまったく消滅するであろうことを十分知っているのだ。

したがって、人も知るように、労働生産物を個人に割りふることを主張する人々に新たな力を与えるのは、この理論ではない。この理論はただ一つの結果を獲得したにすぎなかった。すなわち、革命的思想の及ぼす影響を緩和しようとするこれら若干の社会主義者たちの仮面を

剥ぐ、という結果である。それは、われわれの眼を開き、われわれにははっきり共産主義者たることを言明する必要を知らせた。

だが最後に、われわれの反対者たちが提出したただ一つの重大な異論にふれるとしよう。われわれが必然的に共産主義に向かうであろうとすることに、すべての者が一致している。しかし人々は、最初は生産物が十分に豊富ではない以上、配給、分配が必要であり、労働生産物の最良の分配は、各人が果たした労働量にもとづくものであるとわれわれに指摘する。

これに対してわれわれはこう答えるだろう。将来の社会では、配給を行なわざるをえないときでさえ、人々はいぜん共産主義的でなくてはならない、すなわち配給は功績に応じてではなく必要に応じて行なわれるべきである、と。

家族を例にとろう。この小さな共産主義、これは、なるほど無政府主義的であるよりも権威主義的な共産主義のモデルだが、ほかの点ではわれわれの例として変わるどころは何もない。

その家族においては、日に父親は五フラン、長男は三フラン、その弟は二フラン、いたずらっ子はたった一フランを持ってくるとする。みんなはその金を母親に渡し、母親は出納係をつとめ、彼らに食事を与える。彼らの出資は等しくはない。しかし食事のときには各自が思いのままに、また自分の食欲に応じて料理を皿に取り分

ける。配給などということはない。だが暮らし向きが悪くなり、母親は貧困のために、やむなく食事を配るのにも、もはやめいめいの食欲や好みに任せることができなくなつたとする。そこで配給をすることが必要になり、母親の発意なりみんなの暗黙の約束なりによって、一人前の食事が減らされる。しかしこの割当ては、功績に応じて行なわれるのではないことに注意するがよい。なぜなら、いちばん多くの分け前を受けるのはいちばん年下の者であり、とくにいたずら盛りの子供だからであり、いちばん上等の食べ物というと、これは何一つ提供しない老年者のためにとって置かれるからである。食料欠乏のさいにさえ、家族ではこの必要による配給の原則が用いられている。将来の人類大家族においては、これと異なるであろうか？

……人は共産主義者でなくして無政府主義者であることはできない。実際、どんなにわずかでもこれを制限する考えは、すでにそれ自体のうちに権威主義の芽を含んでいる。それが現実に現わされるとき、ただちに法律、裁判官、憲兵を生み出さざるをえない。われわれが共産主義者でなくてはならないのは、共産主義においてこそわれわれは、真の平等を実現するだろうからである。われわれが共産主義者でなくてはならないのは、集産主義の詭弁を理解しない民衆も、友人ルクリュやクロボトキンがすでに指摘したように、共産主義なら十分に理解しているからである。無政府主義者であるがゆえに、アナ